

『本朝食鑑』の内容と特色

『本朝食鑑』一二巻は、元禄十年（一六九七）に初版が刊行され、そののち年次不明であるが再版されている。よって、この本がひろく、また長く求められたことがわかる。

著者人見必大は、巻頭に、「この書の大意は、民の日常生活に用いる食物の好悪について弁よしあし別することにある」と述べている。つまり、一般庶民の日常の食物について、医学上の見地からその良し悪しを解説することを主眼としている。本書の特徴と史的意義を要約すると、つぎのようである。

① 教科書とされた『本草綱目』の記述を鵜呑みにせず、薬物の国産品にもとづいて、実検的に吟味・検討を加えながら批判的に摂取しようという学的潮流の中で著述された。

② 庶民の日常生活に用いる食物を対象とするため、餅の種類を述べたり、鰯の料理法をくわしく挙げたり、民間の行事との関係に言及したり、諺を引用する。

③ 一二巻中の八巻を動物性食品にあてているのは、先行の著述と大きく異なるところであり、ことに魚介類に多くの紙数を割き、乾魚・塩魚・加工品についてもくわしく述べている。

④ 自序に「その気味・主治を搜り求めること凡そ三十余年」というように、実検・実証を経たもののみを記述。

⑤ 中国産と本邦産と異なるものについてその異同を吟味し弁別している。

⑥ 産地による味わいの違いや、加工方法による味わいの違いなど、くわしく言及している。

⑦ 食物史の上で重要な資料がきわめて多い。

⑧ 民間行事に関する記述が多く、民俗学資料として貴重。

⑨ 日本と中国の民間譚の宝庫でもある。

⑩ 国語語彙史の資料としての意義がある。女房詞も多く収録され、オランダ語もかなりある。